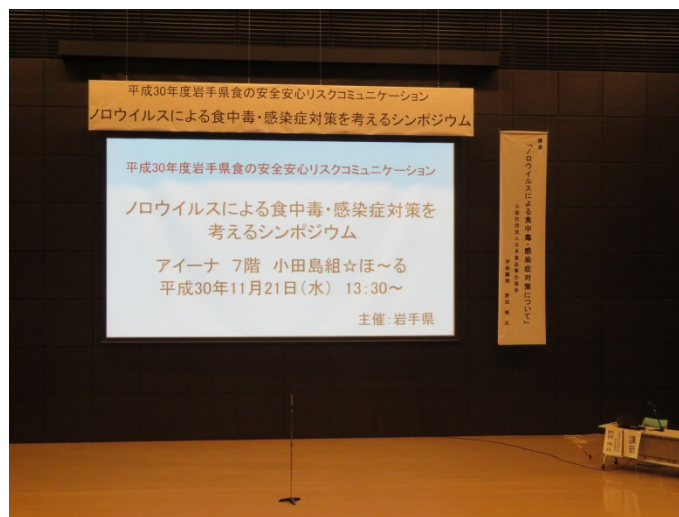


平成30年度岩手県食の安全安心リスクコミュニケーション(第2回) ノロウイルスによる食中毒・感染症対策を考える シンポジウム 開催結果概要



H30.11.21 県民くらしの安全課

1 開催概要

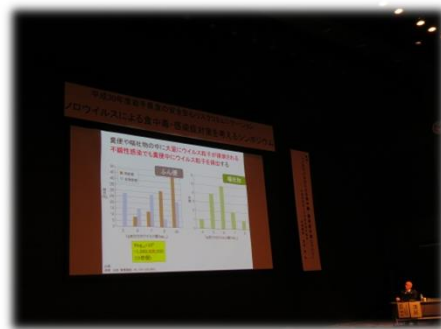
目 的	県内の食品安全に関わる方々を対象に、ノロウイルスによる健康被害について、基礎知識や具体的対策等を学んでいただき、食品衛生についての正しい知識の普及及び食中毒の発生・感染拡大を防止するため、シンポジウムを開催します。
日時・会場	平成30年11月21日(水) 13:30～15:50 いわて県民情報交流センター「アイーナ」7階 小田島組☆ほ～る
参加者	約100名
内 容	◆講演 「ノロウイルスによる食中毒・感染症対策について」 ＜講師＞ 公益社団法人日本食品衛生協会 学術顧問 野田 衛 氏 ◆質疑・意見交換等 参加者からの事前質問、会場からの質問等

2 講演

「ノロウイルスによる食中毒・感染症対策について」

講師 公益社団法人日本食品衛生協会 学術顧問 野田 衛 氏

内容 ノロウイルス感染症・食中毒の発生状況や予防法、刻み海苔関連食中毒事件の内容、ノロウイルスの培養等について解説いただきました。



3 質疑等

参加者から事前に寄せられた質問等のほか、会場の質問・意見に対し、講師に解説していただきました。

☆司会

岩手県環境生活部県民くらしの安全課
食の安全安心課長 前田 敬之

☆アドバイザー

公益社団法人日本食品衛生協会 学術顧問 野田 衛 氏

◆ 質疑・意見交換

1 流行しているウイルスの型を知る方法はあるのか。自分に免疫があるのか、全体的な免疫の獲得状況が知りたい。

⇒ 感染症疫学センターのホームページ上で流行している型は確認できるが、集計に時間を要することもあり、その時点でのタイムリーな情報を得ることは難しい(得られるのは1~2カ月前のデータ)。最新の情報が得たいのであれば、各自治体におけるウイルス検査機関(部署・センター)に問合せしてもらえば、情報が手に入るかもしれない。また、免疫の獲得状態については、抗体の調査手法を知る研究者に個人的に頼むようなことがない限り、一般的に調べることが困難である。

◆ 質疑・意見交換

2 ノロウイルスの菌は1ヶ月に及び排出されるが、保育園としては長期に休ませるわけにもいかず、除菌等対策に気を遣っている状態。学校に入学している子はノロウイルスが発生しても休まなくていいという例もあるようで、幼い子を預かる立場としては対応に疲れてしまう。対応について、御指導いただければうれしい。

⇒ 基本となる考えは、「嘔吐や下痢等の症状が治まるまでは休ませる」ということ。症状が治まった後どのくらい休ませればよいのかについては、明確には示すことができない(コーデックスでは「数日間」という表現がされている)が、まずは「症状が治まるまで」というラインを基準にしてほしい。

ただし、症状が治まった子どもを復帰させる場合は、ケアをする先生を限定する、遊び場を可能な限り他の子どもから隔離する、使用後のトイレの消毒を念入りに行う等、二次感染予防をいつも以上に徹底することが重要である。

◆ 質疑・意見交換

3 ノロウイルスは子どもの感染が多いが、その原因はどこから来ているのか。周りの大人の不顕性感染が原因なのではないかと思っているのだが、ご意見を伺いたい。

⇒ 牡蠣を食べて自身が感染したときのデータを詳細に記録した研究仲間の結果では、7年前に感染したウイルスについては感染が起きなかったという結果が出ており、免疫は思ったより長期間効果を発揮するのだという印象を持った。腸管に分泌型IgAがあるうちは免疫が効くので再感染が防げるが、それがなくなると再感染してしまう、という考え方が従来はあったのだが、この研究データによれば、一回同じ型のウイルスに感染していれば、相当の期間は免疫記憶が残ることが分かる。30種類ほどあるウイルスの型全てに感染している人はいないだろうが、大人は免疫記憶によって再感染しにくくなっている(感染しても症状が軽いものになりやすい)ケースが多いため、症状が顕在化せず、無意識の内に他人に移してしまっていることが考えられる。大人と子どもそれぞれの患者数を記録していないため、明確にはお答えできないが、子どもが主体となつての感染・発症よりも、大人の不顕性感染者経由での感染の方が、割合としては多い可能性もある。

◆ 質疑・意見交換

4 きれいな環境とそうでない環境では、除菌の効果にも差が出るという話があったが、調理場等では、「きれいな環境」「汚い環境」の差は具体的にどういうところか。調理をし終わった後すぐに次亜塩素酸ナトリウムで消毒しても、それはあまり意味がないのだろうか、とも思ったのだが。

⇒ きれいな環境づくりにおいて、基本的な考え方としては、「消毒する前にまず洗淨をする」ということを念頭に置いていただきたい。対象となるもの（例えば包丁等）をまず洗淨してきれいにしてから、消毒作業を行うということをあらゆる場面で考えることが重要である。

◆ 質疑・意見交換

5 通常ノロウイルスは冬期の感染数が多いが、昨シーズンは4月以降に件数が増えた。この原因として考えられることがあれば教えてほしい。

⇒ 一つは、メジャーなウイルス型(G II /4、G II /2、G II /17)が冬場に流行しなかった分流行が遅れたということ、もう一つは、同時期にインフルエンザが流行したこと(「インフル防止のため人々が手洗いを徹底するようになる」「腸管免疫がノロ・インフル双方に同じように作用する」等の理由で、インフル流行年にはノロウイルスの流行が抑えられるという話もある)が考えられる。ただ、春口～初夏のノロウイルス食中毒の件数自体は、過去10年と比べてあまり変わらない。冬期の件数が少なかったため、増えたような形になったのではないか。いずれにせよ、様々な原因が複合的に存在していると思われる。

◆ 質疑・意見交換

6 HACCPの考えについてもお話があったが、HACCPに沿った衛生管理の重要性を消費者の方々にどう理解してもらうか、（行政として）いろいろ苦慮しているところである。何かご助言をいただければ。

⇒ HACCPを推進していく一番の原動力というのは、「消費者の声」であると個人的には考えている。詳しい中身・内容を知ってもらう必要性はそれほど高くない、何となくでもその言葉を日常的に使用してもらうことが大事ではないか。その方法はいろいろあると思うが、そこは行政の手腕であると思うし、全国で参考にされるようなPR方法をぜひ県でも考えてもらえたらよいのかなと思う。

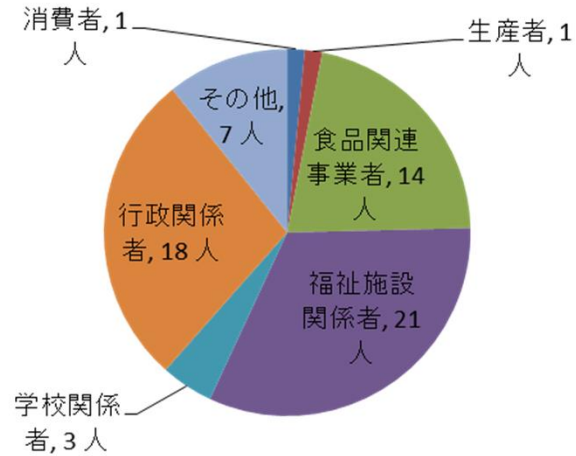
◆ 質疑・意見交換

7 ノロウイルスの免疫が相当な期間持続することも考えると、ワクチンの作成ができれば、多少高額であっても普及するのではないかと考えるのだが。

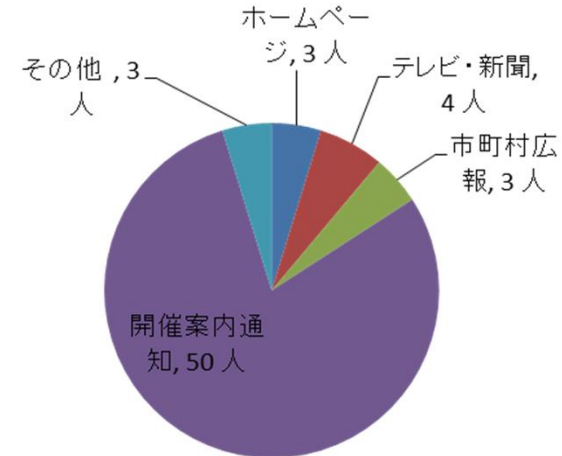
⇒ アメリカでは研究も進んでいて、試薬化できるような状態にはあるのだが、普及はそう上手くはいかないのではないかと思う。理由としては、様々な存在するウイルスの型全てに対応できるワクチンの作成が困難であるということ、また、感染阻止においては「腸管における分泌型IgAの誘導がいかに早くできるか」という点が極めて重要なのだが、そういった免疫を発生させるために、いわゆる注射で打つようなワクチンでは全く効果がなく、生ワクチンのように腸管から直接感染させるやり方でないと効果が出ないということが挙げられる。

アンケート結果

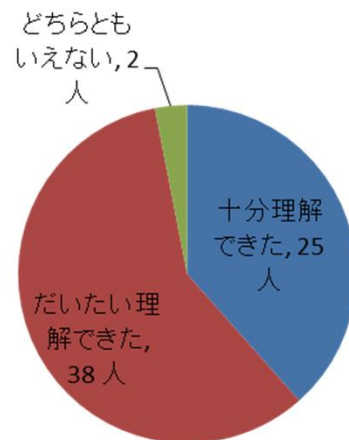
回答者の属性



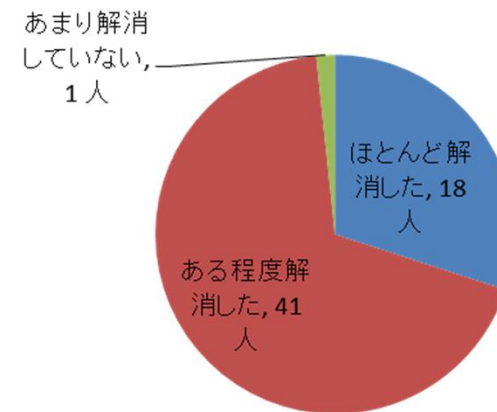
開催を知ったきっかけ



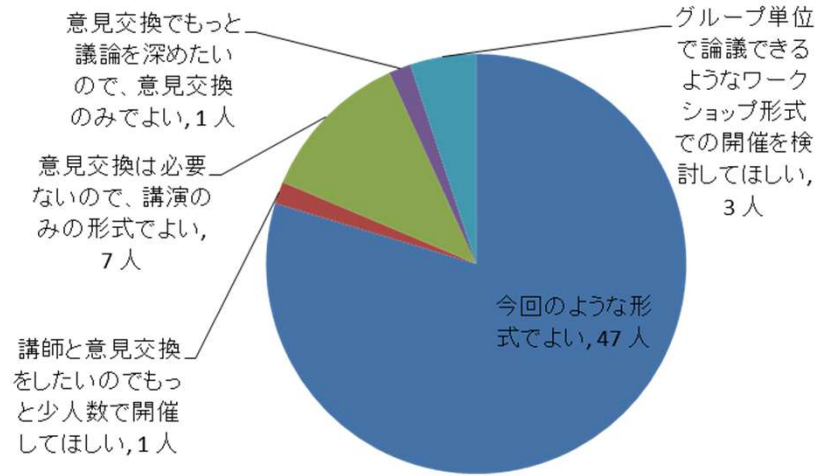
講演の内容



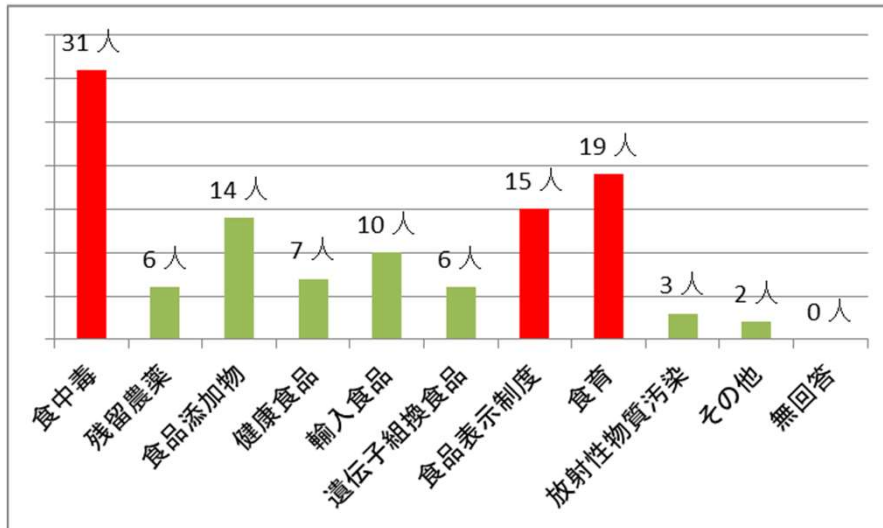
疑問の解消



今後の開催方法



今後取り上げてほしい話題



参加者からの主なご意見

- ・ 飲食店従事者として、対応の仕方等勉強になりました。他のスタッフにも伝えたいと思います。
- ・ 講演と質疑・意見交換で理解が深まりました。ありがとうございました。
- ・ 調理業という職業に初めて就いた自分にとって、とても分かりやすく、今後注意したいと思うことがたくさんありました。
- ・ 講演はある程度理解できたのですが、人手不足等で、現場に戻ってから行動に移すのが難しいのが現状です。まず最初に、最低限何を優先すべきか、分かりやすく教えていただければありがたいと思います。
- ・ 会場が寒かった。
- ・ 会場は小さめの会議室等(50名～100名)の方がよい。
- ・ どのように感染するか分からないこと、症状が出ないまま知らずに生活していることに不安を感じます。
- ・ 先生の説明が丁寧で分かりやすい。学術的な事項をたくさん入れてほしい。
- ・ 施設に出向いてもらって研修をする形も良いのではないかと思った。
- ・ もう少し参加者が多く来てほしかった。